

だれかの笑顔のために

◇◆4年間の感謝を込めて◆◇

この4年間、この学校だよりを読んでいただき本当にありがとうございました。「毎回楽しみに読んでいます。」とお声かけ頂いたこともあり、とても感動し次号発行への励みになっていました。

私は、本年度末で役職定年を迎えます。定年は63歳ですので、もう少し子どもたちのために頑張りたいと思っていますが、校長として仕事ができるのは今月末までとなります。この4年間は、教師としての私の大きな学びとなりました。本年度で教師生活38年目となりなりましたが、初任以来ずっと中学校勤務で、菊水小学校がはじめての小学校勤務でした。最初は、中学校との文化の違いに戸惑うことが多かったのですが、この4年間で小学校教育の大切さを学ぶことができました。また、純粋な子どもたちの笑顔に癒され、いつも元気をもらうことができていました。

最後に、少しだけ自分のことを話します。私が教員になろうと思うようになったきっかけの一つは、わたしの幼いころの経験からきていると考えています。私が幼い頃生活していた家はとても古く、わら屋根の上にトタンをのせたトタン屋根の家で、冬は木炭の掘りごたつを利用していました。

3歳の頃のある冬の日、その掘りごたつで寝ていた私は、誤って火のついた木炭の上に落ちたそうです。そして大やけどをしました。熊本大学病院に入院していたことを覚えています。

今でも尻と右足の一部にやけどの跡(ケロイド)と左の太ももに皮膚移植の跡が残っています。そのやけどが後々私の劣等感となっていったように思います。小学校時代を思い起こしても、やけどのことをいつも気にしている自分がいました。やけどのことで友だちからばかにされるのではないかと不安な気持ちがあったのです。友だちと口論になったとき、私へのとどめの一言は「尻丸焼け」でした。何も言い返せなかったこと、言い過ぎたかもしれないととまどった友だちの表情を今でも覚えています。服を着ていれば自分にやけどの跡があるなど、外見ではだれにもわかりません。しかし、いつもそのことを気にしながら生活している自分がいました。そのような理由からでしょうか、私は人前に出るのがとても苦手でおとなしい子どもでした。小学校の入学式では、氏名点呼のとき、返事をして起立することができなかったほどです。

しかし、小学校高学年の頃、自分の考え方を变えようと思うようになったことを覚えています。「自分はやけどのことでだれにも迷惑をかけているわけではない。もっと堂々としよう。」と自分に言い聞かせるようになりました。このような経験があったからだと思います。私は、「本人ではどうすることもできないようなことで、その人をばかにしたり笑ったりすることは間違いだ。」そんな思いをみんなに伝えたい、それができるのは学校の先生ではないかと考えるようになりました。



教員になって、人権教育と出会い、その大切さをこれまでずっと感じてきました。

人の気持ちを考えることの出来ない「人の心の冷たさ」は、差別を生み、人と人との関係を切っていく。「にんげんのあたたかさ」は、人と人との関係をつないでいきます。そのあたたかさ(人権感覚)は、学習(教育)によってより強いものになると信じています。

校長職を離れても、児童の憂いに心を寄せることのできる「あたたかさ」を持つ優しい教師でありたいと思っています。しかしながら、この4年間は、私の力不足もあり、様々な場面で保護者の皆様にはご心配をおかけしたことと思います。それでも、本校教育活動へ多くのご支援をいただいたことに心から感謝申し上げます。

菊水小学校の子どもたちの未来が、幸せに満ちていますことを心から願っています。